

研究
レポート

「ブラジル日本人入植地の歴史民俗学的研究」 初年度の研究活動をおえて

泉水 英計

日本常民文化研究所における南米日系人社会に関する研究は、神奈川大学の国際交流事業の一環としてスタートし、科研費挑戦的萌芽研究を経て、本年度（2015年度）からは同基盤研究「ブラジル日本人入植地の歴史民俗学的研究」として向こう4年間の計画で本格的な調査研究活動が開始されている。これまでの経緯については他稿（『比較民俗研究』29号）に記したので、ここでは初年度の活動を振り返りつつ今後の展望をうかがってみたい。

まず、研究会では、先行研究の成果を吸収する目的で所外の専門家を招いた。これによって、共同研究の参加者は、対象地域についての知見を深め、個別課題の調査に向けた基盤の獲得を目指した。第1回研究会（6月6日）では、黒瀬郁二氏（鹿児島国際大学）による「イグアペ植民地の成立と展開」、第2回研究会（7月25日）では、中牧弘允（国立民族学博物館）による「ブラジルの日系宗教—エンデミックとエピソードの視点から」という研究発表があった。

つぎに、共同研究者による調査活動は、日系移民家屋の実態解明と記録を専門的に扱う建築班（本学建築学科内田青蔵、渡邊裕子：文化学園大学准教授、田中和幸：田中建築研究所所長、須崎文代：本学非文字資料研究センター客員研究員）と、日系植民地の形成史および日系社会の生活誌を扱う民俗班（本学国際経営学科泉水英計、李徳雨：本学大学院生）に大別され、それぞれのメンバーが個別課題に関連して国内およびブラジルにて調査を開始した。

建築に関する調査では、本研究の主要な調査対象地であるブラジル国サンパウロ州レジストロ市

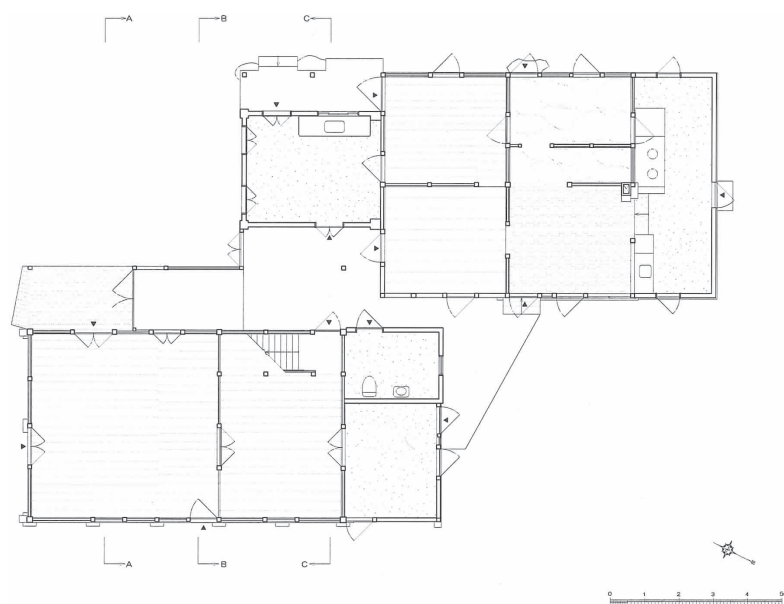


図1 沖山すず家住宅1階平面図

から博物館明治村（愛知県）に移築された日系移民家屋をまず見学した。同施設の学芸員から移築の経緯や関連資料について説明を受けるとともに、現地での実測作業を準備するための参考情報を収取した（6月13日）。一方、歴史・民俗に関する調査では、レジストロ市の初期移植民の親族を訪ねた。その母村である八丈島に赴き、移植民家族の来歴と移民送出の社会的背景について調査した（2016年1月4日～6日）。

本年度の調査活動の主軸となる現地調査は、建築班と歴史・民俗班の合同で2016年2月21日より28日までレジストロ市でおこなった。建築班は同市内に点在する日系移民家屋9棟を巡見し、そのうち保存状態が良い4棟を選んで実測調査を実施した。この実測調査によるデータをもとに作成されたのが沖山すず家住宅平面図(図1)と沖山すず家住宅軸組図(図2)である。この図2から、基本的構造は日本の伝統的な軸組と共通していることがわかる。また、このことから、この建物の工事担当者が日本の伝統技術を理解していた大工であった可能性が考えられる。

一方、民俗班はレジストロ市日系文化協会事務所にて日系移民の年長者10名からそれぞれの個人史および往時の日系社会の生活の様子について聞き取りをすすめた。話者の選定にあたっては、とくに八丈島および沖縄県出身者を優先し、これらの地域の日本社会における構造的な位置から移民送出の歴史過程を分析する糸口となるよう

配慮した。また、比較研究を念頭に、民俗班の一部はサンパウロ市街地における韓国人移民地区およびロサンジェルス市の全米日系人博物館でも調査をおこなった。これら両班の収集データは、現在、他の研究者も利用可能な形で提供するために整理作業が続けられている。

今年度のブラジル現地調査では、本共同研究とは別途進行している日本人入植地研究プロジェクトとの遭遇があった。現下、レジストロ入植地の日系移民家屋についてサンパウロ大学の脇岡明美氏が本格的な研究をまとめつつあり、彼女の研究協力者の米田誠士氏も現地に長期滞在して独自の調査を進めていた。本共同研究とは、対象地域にも研究視角にも重複があることから積極的な交流と情報交換がのぞまれる。

以前の現地調査と同様にレジストロ日系文化協会からは現地での案内や話者の紹介について全面的な協力をいただいた。とりわけ今年度は、レジストロ市要人への紹介、比較材料となる隣接ヨーロッパ系入植地パリーケラアス市の訪問、再興の兆しのみえる製茶業の取材斡旋など、調査活動の範囲を拡大することができた。

次年度は、歴史・民俗班を中心にそれぞれの個別課題に応じた現地調査をすすめる予定である。

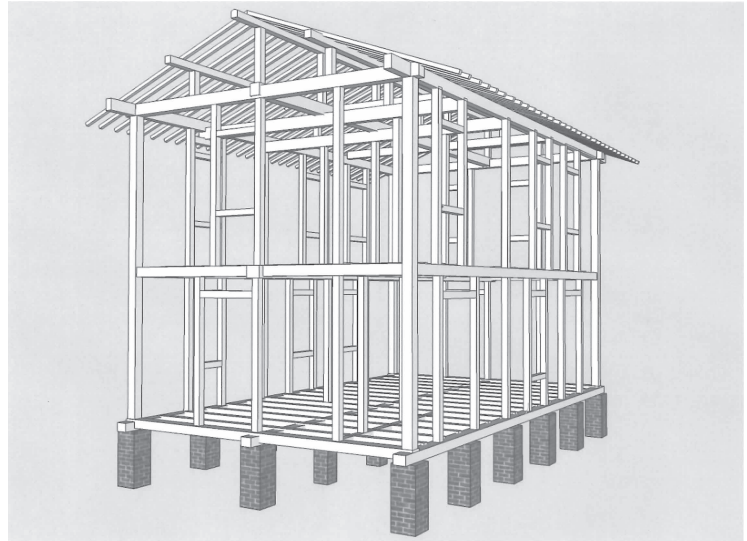


図2 沖山すず家住宅軸組図



写真1 レジストロ市長表敬訪問